

『うらみのすけ』の文芸構造

水田潤

1

「かな草子」の本質的な近世化は、寛永期の整版本の刊行をまたねばならない。しかし、写本・古活字本によってその原型が伝えられる『うらみのすけ』が、「慶長九年のすへの夏」の「きよみづのまんどう」に、時と場を設定し、「そのころみやこにかくれもなく色ふかき」「くずのうらみのすけ」ほかの享楽人物を配したとき、『うらみのすけ』の作者の文芸意図は、当然のことながら、これらによって構図化される当世にむけられていた。

そもくころはいつぞのことなるに、慶長九年のすへの夏、かみの十日のことなれば、きよみづのまんどうとて、そでをつらねてみやこ人、四条五でうのはしのうへ、らうにやくな女貴賤(清)都鄙(老)、いろうめくはなごころも、げにをもしろきありさまなり。こゝにくずのうらみのすけ、ゆめのうき世の助、松のみどりのすけ、きみをおもひのすけ、なかぞら恋のすけ

『うらみのすけ』の文芸構造

とて、そのころみやこにかくれもなく色ふかきおのこどもあり。

『うらみのすけ』の人物たちは、それぞれ「慶長九年のすへの夏」の都の享楽風俗を背景にして登場する。松田修(1)氏や野間光辰(2)氏は、これらについて、このころの諸記録による事件や実在の諸人物を指摘し、さらに野間氏は、「うらみのすけ」をはじめとする「色ふかきおのこども」に、『当代記』にいう「かぶき衆」を想定する。しかし、『うらみのすけ』にとつては、そのことはそれほど重要なことではない。『うらみのすけ』の登場人物たちは、「そのころみやこにかくれもなく色ふかきおのこ」や、「この衛殿」の養女として仮託の「ゆきのまへ」ほかであればよく、「うらみのすけ」や「ゆめのうき世の助」なども、野間氏のように、これをあえて「かぶき衆」とする必要もない。

「かぶき衆」とは、いうまでもなく、ただの異端・放縦や、だて者・好色者だけの意味ではない。『当代記』によれば、「かぶ

き衆」の実態は、次のように伝えられている。

六月、此比、京町人北野・賀茂辺 出行之砌は、かぶき
当世異相
を比云衆出會たはぶれ、為_レ之惱さる。其上耽_二女色_一、覺外
之儀多之……以外逆鱗也。(巻四、慶長十一年)

「当世異相」については、『駿府記』の「其族、世所謂歌舞妓
者也。切_二下鬢髮_一、染_二狂紋_一、所_レ帶大刀長柄、其刃刻_二戲言_一、其容
貌不_レ尋常」(慶長十七年七月七日)の記事がその詳細を伝える。異
端の行動についても、『台徳院殿御実記』は、「京洛の富商後藤
并茶屋等が婦女、祇園・北野辺を逍遙せしに行あい、ゆくりなく
その婦女をおさえ、しいて酒肆にいざない酒をのましめ、従者等
をば、そのあたりの樹木に縛り付、刀をぬき、若し声を立は伐て
すてんとおびやかし」などと、その狼藉の子細を伝えている。『武
徳編年集成』『老人雑話』ほかにも、同種の記事が見える。

しかし、『うらみのすけ』に登場の「くずのうらみのすけ」ほ
かの「そのころみやこにかくれもな」き諸人物は、ただ「色ふか
きおのこ」として仮託されたにすぎない。その人物像も「うらみ
のすけ」をのぞいては、ほとんど形象化されてはいない。「色ふ
かきおのこ」とは、あとで「おもひのすけ、こひのすけ」などに
よって語りだされるように、「つね〜」に六でうへんへかよひ」
「ながれをたつるあそび物にも、こころをひかれ」る「ぬめり者」
にすぎない。「ぬめり者」については、『松の葉』の「さてもつ
れな金銀さまや、きんぎござらざ、ぬめりて暮らそ、それを誰

ぞと尋ねて聞けば、六条下の町の和歌山さまの、内の山の神が聞
いたらば、たけ〜たけりやろものを。」(第一・葉手・五)によっ
て、その大要を知ることができるが、『うき世物語』の次の記述
がその詳細を伝えている。

編笠引こみ、衣紋の馬場・噂町をうちすぎ、あげや町にさ
しかり、……袖のなり大そぎにそぎて、つまたかく引まは
し、はゞのひろき帶うしろにむすび、たゞき鞆の中わきざし
金鐔をざらめかし、うねざしの踏皮にぼたんをいれ、席駄を
ならしういで立ちける有さま、さかやきは耳のもとまでそり
さげ、鬢うすく、鬚くひそらし、蘭栖の大あみがさまぶかに
引こみ……殿中風のたゞなかなり。(巻一の六)

『うらみのすけ』の成立時期と、『うき世物語』のそれとの時
代的なへだたりを考慮に入れるとしても、『うらみのすけ』を論
じるにあたっては、「ぬめり者」と「かぶき衆」との相違は明ら
かにしておく必要がある。『うらみのすけ』の成立の背景に、当
世の「かぶき衆」の存在があり、『慶長見聞録案紙』や『慶長年
録』、『当代記』『慶長日記』などによってうかがわれる「松平若
狭守近次」ほかの狼藉や、「女色に耽りし事」による改易があつ
たとしても、これらは、ひとまず別の次元で考えられなければな
らない。文芸の主体概念や方法は、表現主体の文芸的当為そのも
のとして理解されなければならない。

田中伸氏は、「うらみのすけ」ほかの仮託人物の設定について、

『慶長日記』所載の「大鳥居逸平」一党の「大風嵐之介」「天狗摩右衛門」「風吹散右衛門」など、実在の「かぶき衆」の替名によるヒントを指摘しているが、命名の発想の相違にも明らかになうに、これらと「うらみのすけ」「ゆめのうき世のすけ」ほかの諸人物の設定とは同じではない。野間光辰⁽⁴⁾氏は、これらの「色ふかきおのこ」どもを、「松平若狭守近次」や「かぶき衆」からの連想によって、「公家衆ではなく、明らかに武士」ともしているが、このこともまた、それほど重要なことではない。「うらみのすけ」は、悲恋の物語の主人公にふさわしく「一だんこころぼそきもの」であり、「ただ一人きよみづへ参り」「らんかんこしをかけ、参りの^(道者)やをながむる」無為の形象人物にすぎない。「ゆきのまへ」への接近も、「いかさま此御かたさまの御ゆかりをたづねばやと思ひ、まくのちかくにたちよ」るだけの行為にとどまる。この行為は、『当代記』や『台徳院御実記』が伝えるような「かぶき衆」の狼藉ではない。『うらみのすけ』の発想について、作者の文芸的意図やその背景に、かりに松田氏や野間氏が指摘するような、原事実による衝動があったとしても、すくなくとも「くずのうらみのすけ」ほかの人物設定に当たっての作者は、当世の「かぶき衆」の再現や、原事実の復元や暗示を意図してはいない。また、「実名をあらわすことを憚ってわざと替名を用いた」⁽⁵⁾ものでもない。

『うらみのすけ』の作者の当為は、これらの諸人物の命名に象

『うらみのすけ』の文芸構造

徴される古歌的情感と、その屈折・複合によって統合される近世的享楽感情の照射にあったと見なければならぬ。すでに諸家によって指摘されているところではあるが、それぞれの典拠を示せば次のようになる。

くずのうらみのすけ——「秋風の吹きうらちかへす葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな 平貞文」(古今集・十五・恋五。「何を歎くぞ葛の葉の恨みはさらに尽きすまじく」。(謡曲「葵上」。(なお、「葛の葉」「うらみ」を修辭にふくむ古歌は、他にも用例がある。)

ゆめのうき世の助——何か思ふ何かは歎く覚めやらぬ夢のうちなる夢のうき世を 後鳥羽院」(新拾遺集・十九・雑中)。

松のみどりのすけ——「時わかぬ松のみどりもかぎりなきおもひにはなほ色やもゆらん 読人しらず」(後撰集・十二・恋四)。

きみをおもひのすけ——「満つ潮の末葉をあらふながれ蘆の君をぞ思ふうきみしづみみ 大納言公実」(千載集・十三・恋三。「消え果ててやみぬばかりか年をへて君をおもひの験なければ 読人しらず」(後撰集・九・恋歌一)。

なかぞら恋のすけ——「はつ雁のはつかに声を聞きしよりなかぞらにのみ物を思ふかな 凡河内躬恒」(古今集・十一・恋歌二)。「恋よ恋、われ中空になすな恋、恋には人の死なぬものかは」(謡曲「恋重荷」、狂言「枕物狂」ほか)。

なお、「くずのうらみのすけ」の連想については、前田金五郎⁽⁶⁾氏の指摘のように、「葛の葉は何をうらむかの〜、思ふとて又振りのめすな、たぶん振より現はるゝ、恨めしや」(隆達小歌集)や、「夢の浮世の露の命のわざくれ、なり次第よの、身はなり次第よの」(同上)などの近世歌謡の享樂的情感の移入があったことも否定できないし、むしろこのことがより重要である。経緯や結末に焦点を当てるなら、『うらみのすけ』は、「きよみづ」^(清水)の上藤との出あい、観音への祈念、夢想、恋文の授受、後朝、思ひ死という中世恋物語の継承にとどまるかに見える。また、このことだけからは、『十二段草子』や『朝顔の露の宮』などの諸形式との同質性も言われよう。しかし、『うらみのすけ』の作者の文芸意図は、もとよりこのことにあつたわけではない。『うらみのすけ』で描かれる近世風俗の諸現象も、作者をとりまく近世化諸現象が、作者を過程的に支配し、『うらみのすけ』に、近世的要素を付与する結果になつたものではない。「慶長九年のすへの夏、かみの十日」の「きよみづのまんどろ」や、「くずのうらみのすけ、ゆめのうき世の助」ほかの「そのころみやこにかくれもなく色ふかきおのこ」どもの設定、「うらみのすけ」が見た享樂風俗の配置によつても明らかのように、『うらみのすけ』の発想の時点から、この作者の当為や、その文芸的意図は、当世を舞台とする新しい恋物語の制作にあつた。

「慶長九年のすへの夏、かみの十日」については、野間光辰氏⁽⁷⁾

の考証によれば、「その日はあたかも、家康が伏見城を出て二条城に入り、公家衆を引見しているから、側近に侍する恨の介に物見遊山の余裕などある筈がない。また、六月十日の清水の万燈見物ということも納得し難い。」などとある。しかし、これらのせんさくは、このばあい、さしあたってはそれほど重要なことではない。むしろこのことに関しては、市古貞次氏の発言が一つの意味を暗示している。市古氏は、「中ごろの事にやありけん」などとしてはじまる中世の作品の書きだしと、『うらみのすけ』の書きだしについて、次のように言う。

「豊後崩聞書」に、「比はいつぞの比かとよ、慶長五年かのへ子の歳、七月上じゆんごろより、花の天下に弓矢出来る。ゆへをいかにとたづぬるに……」とありまして、これはくどき節や語り物などで好んで用いられた一つの型ではなかつたろうかと思ひます。……ですから「恨の介」の作者の創り出したものではないと思うのですが、何にしても中世のわくから大きく踏み出した功績は、認めてよいでしょう。

『慶長見聞集』などでも、この発想は同じである。

見しは、今、江戸町繁昌ゆへ観進能毎月毎日おこたることなし。……老若男女、貴賤群衆をなして目を悦しめ、あまりの面白さにおのゝえも朽ぬべしと見物せしに、能七番あり。……爰に春庵と云(知)人、愚老なくを見てあざわらふ……
「慶長九年のすへの夏、かみの十日」とは、年次や日録的事実

の考証がたいせつなのではなく、『うらみのすけ』では、この物語を、「今は昔」や「中ごろの事」としてではなく、「見しは今」の当世の物語としたことの意味が問われなければならない。これは、『好色五人女』巻三の書きだしが、「天和二年の暦、正月一日吉書万によし。……爰に大経師の美婦として浮名の立つべき」として、当世を強調して「おさん」を登場させたことにも通じる当為である。また、「ここに、くずのうらみのすけ、ゆめのうき世の助」などとして設定された諸人物も、その命名に仮託されたものは、「大風嵐之介」や「天狗摩右衛門」のそれに象徴される「かぶき衆」の狼藉ではない。これらはいずれも、「これよりすぐに(北野)とよくにへ」「いざやわれらは(祇園)ぎざん殿」「きたのへいざゆきて、(小歌)た、これは「ゆめのうき世をぬめろやれ、あそべやくるへみな人」ほかの「たふせい(当世)はやるこうた共」によって供宴する当世風俗との重層としても、その典型性が理解されなければならない。「くずのうらみのすけ」ほかの命名も、遠い印象距離にある古歌的情感やイメージの再生ではなかった。

七月十日の「きよみづ(清水)のまんどう」は、『案内者』にも記録するように、「此夜舞台にして、参詣のわかき者共踊する」(巻四)狂宴の場であったし、「四条五でうのはしうへ」の「いろめくはなごころも、げにおもしろきありさま」も、「きよみづ(清水)」を舞台とする酒宴・歌舞の当世風俗との合一をはたしている。したがっ

『うらみのすけ』の文芸構造

て、「これももとよりくわんぜ(観世音)をんの御ちかひあらたに」の文飾をもって導かれる「うらみのすけ」の「きよみづ(清水)」への移行を、このことを例証の一つとして中世小説への退行とすることはできない。市古貞次氏も言うように、「自己の配偶を求めて清水観音に祈願をこめるのは、『清水寺縁起』などにみえ、「清水観音」を「妻観音」とする俗信は、『伊文字』『二九十八』、『お伽草子』の「物くさ太郎」「小男の草子」などにも用例がある。たとえば『伊文字』では、「清水の観世音は験仏者じやと申すによつて、妻乞の祈誓に参ろうと存ずる。……今夜はこれに通夜をしよう。」とあり、『二九十八』でも、「清水の観世音は殊の外験仏者でござるによつて、ただいまよりあれへ参り、妻乞の祈誓を致そうと存ずる。……アラありがたや。あらたに靈夢を蒙つた。」などとして、「清水の観世音」や「妻乞」が配される。この俗信は、「慶長九年」の当世でも、まだ過去のものではなかった。たとえば、近世初期の成立と見られる『わらひ草のさうし』にも、「清水の観世音とやらんは三国一の験仏者と、殊に妻観音(メケ)伝えて聞へし事なれば、急ぎ参りて」などの世俗として発想されている。「うらみのすけ」の清水参籠も、そのことによる世俗との交感にすぎない。また、「ゆきのまへ(雪)」との出あい以後の経緯を問題として、『うらみのすけ』の前時代性を言うことも適当ではない。むしろここでは、「色ふかきおのこ」ながら、「一だんこころばそきもの」として設定された「うらみのすけ」の清水志向が、

「きよみづのまんどう」のもった享楽現象との複合として構図化されていることの意味が問われなければならない。この時期の老若男女の寺社詣では、享楽的世俗そのものでもあった。『十二段草子』や『朝顔の露の宮』に代表される悲恋の文芸構造が、『うらみのすけ』の作者の方法概念としてとり入れられたことは、この時代の文芸が普遍的にもった負教構造の一つではあったが、このことをもって、『うらみのすけ』を中世風の恋物語として処理しざることでもない。

2

「きよみづ」で「うらみのすけ」が見た遊山風景も、「ぬめり」や「共踊」の秩序のなかにあった。

これよりすぐにとよくにへ、いざやわれらはぎをん殿、さてはきたのへいざゆきて、くにががぶぎを見んといふ人もあり。とうふく寺のはしにておどらばや、五でうにててなぐさまんと、われにひとしきとも人をひきつれ、いづれかよからましかはと、こゝろのなぐさまは、うき世ばかりとうちしげる。……おとはのたぎにたちよりてみるに、おちくる水にさかづきをうかべ、さもいつくしきにうはうたち、又はわかしゆも打まじり、手まづさいぎるさかづきをかなたこなたへとりかはし、ゆさんばかりと聞えける。ゆめのうき世をぬめろやれ、あそべやくるへみな人と、よにありがほはうらやま

し。なにゝつけてもかすならぬうらみのすけは、わが身のほどをあんずるに、……我とわが身をなぐさむるばかりなり。

「うらみのすけ」の周辺にあるのは、「こゝろのなぐさみはうき世ばかり」とする享楽的現世でしかない。ここでの「うき世」は、もう抽象的な意味での「憂き世」の転成ではない。『醒睡笑』の「三途河の姥とめを」とになり、やくたいもなき浮世くるひ」(六・恪気)などの用例によっても知られるように、「うき世」は、すでに「浮世くるひ」「浮世あそび」との交響のなかにある。「き野」のへいざゆきて、くにががぶぎを見ん」「五でうにててなぐさまん」などの構文も、当時の享楽地の仮定だけではない。『歌舞伎草子』の記事も伝えるように、「お国」の京都初演は、慶長八年であり、『鹿苑日録』の記録によってもうかがえるように、慶長九年の「北野」は、歌舞伎踊・観進能・女房能などの興行地として、四条河原・五条河原とともに、当世の享楽地であった。都はあげて「浮世あそび」の時代でもあった。また、さきの『台徳院殿御実記』の「京洛の富商後藤茶屋等が婦女、祇園・北野辺を逍遙」の記録でも明らかなように、「いつくしきにうはうたち」の「ゆさん」も、『うらみのすけ』の作者の情念だけの所産や虚構ではなかった。「うらみのすけ」と「ゆきのまへ」の出あいの場に、これらが構図化されたことは、「お伽草子」にはない新鮮さである。「おとはのたぎにたちよりて見るに」からあとの写真や、文体の破格も、このことへの作者の関心のありようを示して

いる。ここにあるのは、ゆるやかではあるが、文芸秩序の近世への移行であり、その実証である。

「ゆきのまへ」^(前)との出あいも、古歌的構文によりながらも、現実的要素を色こく反映させている。

かゝりけるところに、^(田村)たむら堂のほとりにして、はなぞめの袖いろめきて、ほの／＼とあかしのうらにあらねども、見えがくれする人々のあまた見ゆるはなにやらんと、たちよりとをきゝぬれば、しゆゑんなかばと見えける。とてもこもらばきよみづへ、はなのみやこを見をろして、とゞろ／＼と^(清)なるかみも、こゝはくわばらなどゝいふ、たふせいはやるこ^(小)うた共しどろもどろにうたいなし、はま松のをとはざ／＼とく、いまをさかりときこえける。やなぎさくらをこぎませで、にしきをかざるざしきのてい、……その中にとりても、ことをしらべてをしますす上らうの御すがたをみてあれば、年らいならば十五か六と見え給ふが、くれなるのちしほはかまをふみしだへ、はだにはなにをかめされけん、うへにはしろがりんずにいる／＼のいともつて、ものゝちやうずがぬふたりけり。御うへまへのくだりには……

物語の人物の登場に、まずその衣装の描写からはじめるのは、「お伽草子」の常套手段である。これからあとの「ゆきのまへ」^(前)の描写も、「すそのけまはし」^(前)「おびのけつかう」と、文飾をつくしてつづられる。これはもとより『十二段草子』ほかの方法の

『うらみのすけの文芸構造』

踏襲である。「ひすいのかんざしはあだとたをやかにして」として語りはじめられる容顔の描写も、いうまでもなく「謡曲」「お伽草子」「幸若」などの旧態の継承である。しかし、この近似を

そのまま認めるとしても、「ゆきのまへ」^(前)は、これらと同じ類型人物ではない。「ゆきのまへ」^(前)は、のちに「しやうじがごけ」^(庄)によつて語りだされるように、秀吉の家臣「木村常陸介」の忘れ形見としての「上らう」ながら、「うらみのすけ」でのそれは、「たむら堂のほとり」で、「たふせいはやるこうたども」を、「しどろもどろにうたいなし」で遊宴する享楽風俗のなかの一人である。

「いまやうのしやみせんをてんじゆきりゝとをしまわし、いとをしらべてかんをととり、あいのてをひ」きながら、「八こゑのとりはいつわりをうたふた。まだ夜はよなか、しめておよれよの」

「おもひあかしねは、まつかぜもさびし。なざけはいまのおもひのたねよ。つらきはいまのふかきなさけよ。いつさて花のえんとならふずよの」などと、撥音たかくひきながらして歌う「ゆきのまへ」^(前)の設定も、けつして中世恋物語の主人公の再生ではない。

文芸はつねに伝統の法則によつて支配されるが、『うらみのすけ』のばあいも、このことは例外ではなかった。「うらみのすけ」の妄執からあとの経緯がこのことを具体的に示しているかに見える。しかし、このことについても、『うらみのすけ』の作者の当為がなかったわけではない。すくなくとも『うらみのすけ』は、同じく中世風恋物語として同系列に配される『うすゆき物語』と

は異質の文芸構造によつてゐる。「ものによく／＼たとふれば、
 (唐) (楊貴妃) (摩耶夫人) (眞子) (孝夫人) (星) (宮) (題)
 たうのやうきひまやぶにん、ぐしきみりふじんほしのみや、(題)
 (西) (施) (阿) (閑) (夫人) のせいしあしゆくぶにん……六十やうでのものとても、これには
 いかでまさるべき。」としてつづられる「ゆきのまへ」の形容と、
 (漢) (季夫人) (楊貴妃) (小野) (小野) (女)
 「かんのりふじんやうきひ、をのこまちのわかざかり、によさ
 (三) んのみやのたちすがたも、これにはいかでまさるべき。」や、「さ
 てまた君の御すがた、はるのはなとやあきの月、なをしも物にた
 とふるに、(よさんのみやのたちすがたおほろ月よのなひしのか
 (楊貴妃) (季夫人) み……やうきひりふじんれんせうじやう、せいしのまへに十郎御
 (天) (竺) (卿) せん……もうこしてんじくわがてうに、びじんおほしと申せども、
 いかで君にはまさるべき。」などの「うす雪」との近似をもって、
 その同質性を速断することもできない。「ゆきのまへ」の当世ぶ
 りについて(雪)はさきに述べたが、『うらみのすけ』の作者は、「ゆ
 (前) きのまへ」の容色描写につづいて、その「しやみせん(三)のけつこう」
 (前) におよぶ。

(糖) (糞) (井) ちびのおのところには、くもゐのかりのおとづれて、つば
 さをならべてふるさとへ、かへるところをまきゑにす。……
 (梅) (梅) (総) さてさばのくだりには、世のなかは、ゆめかうつゝか、うつ
 とも、夢ともさらにありてなければといふたを、かな字
 (前) (前) (梅) (総) にぞかきにける。さてまたどうのまきゑには、みやこのうち
 (祇) (團) (清) (水) (賀) (茂) (春日) (波) (羅) をまきにける。ぎをんぎよみつかもかすが、六はら六かくい
 (熊) (野) (豊) (国) まくまの、とよくにの大明神三十三げん大ぶつでん……くほ

(壬子) (天) (王) (寺) つのわうじてんわうじ、いしのとりゐにいたるまで、かなた
 こなたをとりはたし、ものゝぢやうずがまいたりける。

これは、いうまでもなく「洛中洛外図」である。この時代の
 「洛中洛外図」は、狩野永徳による「洛中洛外図屏風」(一五七四)
 に代表されるが、ここに紹介された「ものゝぢやうずがまいたり
 ける」「蒔絵」は、おそらく永徳にも師事した光悦らの手になる
 それと見てよい。「慶長九年」(一六〇四)に時をあわせるなら、
 この年の光悦は、四十代もなかばをすぎた時期である。「ぎをん
 (清) (水) (賀) (茂) (春日) きよみつかもかすが……」として、ながながと写されるこの画譜
 (今) (様) (三) (味) も、その模写であり写真である。これは、「いまやうのしやみせん
 (總) をてんじゆきりりとをしまわし」の風俗図とともに、当世の再
 現である。「さばのくだり」に書かれた「世のなかは、ゆめかう
 (梅) つゝかうつゝとも、夢ともさらにありてなければ」の歌も、『古
 今集』(十八・雑下)からの転用ながら、古歌的情感としてのそれ
 ではなく、「夢か現か幻か、思ふお人にはたと逢ふた」(隆達小歌
 集)や、「夢の浮世の露の命のわざくれ」(同上)などの情感との
 複合である。

ひるがえつて考えるなら、「幸若」「お伽草子」の踏襲と見ら
 れる「ゆきのまへ」での「美人ぞろえ」にも、『うらみのすけ』
 の独自性がある。たとえば、「奈良絵本『十二段草子』での「美
 人ぞろえ」との異同に注意したい。

物によく／＼譬うるに、毘沙門の妹吉祥天女、鬼が娘の十

郎御前、夷が娘のしま王御前と申すとも、司位それ知らず、
貌を申すに、是にはいかでか勝るべき。こゝに美人を尋ぬる
に、はくもとの乙鶴、手越の少将、入間川の牡丹御前、たう
のつじの人丸や、大磯の虎とかや、黄瀬川に亀鶴、でわ夫人、
衣通姫、漢の楊貴妃、しゆし夫人、女三の宮の立姿、朧夜の
内侍の督、弘徽殿の細殿や、小野の小町の若盛り、和泉式部
に、小式部に、紫式部に、染殿の院、鳥羽のてんによと申す
とも、これにはいかでか勝るべき。

『十二段草子』のこの構文は、「ゆきのまへ」にもそのまま継
承されているかに見える。しかし、『うらみのすけ』での次の一
文を見おとすことはできない。

そうじてびじんの其かずは、十二人とは申せども、たとへ
ばかぎりあるまじや。むかしの人は目にはみず、みくにふれ
にしことながら、此上らうの御かたちに、さぞやはまさり申
さんと……

「むかしの人は目にはみず、みくにふれにしことながら」とは、
『十二段草子』の倍数をこえる「美人ぞろえ」をこころみた作者
の自己弁護である。あとでもふれるが、この「美人ぞろえ」は、
『犬まくら』と同質の「物はづくし」である。読みの文芸として
はたいくつなこの「美人ぞろえ」も、『尤之草子』の「これかれ
集りて、かの清少納言が枕草子を真似びて」(序)と同じの「美人
づくし」の文芸遊戯としてなら、そのままなっとくすることがで

『うらみのすけ』の文芸構造

きる。『犬まくら』にも、「問いたきもの——諸道の講釈」、「知り
たき物——用ある文の読まれぬ」、「徒然慰むる物——古の文共取
出たる時」などとあるが、『十二段草子』が内外の美女の並列に
とどまるのに対して、『うらみのすけ』でのそれが、自明のものを
のぞいては、「そのゆきひらの中納言みとせをちぎるまつかぜや、
おなじくむらさめ」、「やうめい天王のこゝろをつくさせたまひけ
るまの殿のひとりひめ」、「し」との四郎が思ひけるきよのおん
な」などと、わずかながらも「講釈」を加えていることの意味も
理解できる。なお、「あぐちのきみ」の対置も、「撰集抄」や「十
訓抄」、あるいは、「謡曲」の「江口」などからの連想によること
は当然であるとしても、のちの『ねごと草』の「むかしのびじん
は申にをよばず。いまの世にもてはやす、花のみやこにおやまの
きみ、むさし(武)のくににきこえてうつくしき、みめよし(吉)はらのかつ
山や、名をもよしだの御すがたを、たぐひあらじとききつたへし
も」への過程として、名妓への関心の重層であったと見てよい。

「ゆきのまへ」じしんも、「しやうじがごけ」によってながな
がと語りだされるように、秀次謀反事件に連座の「木村常陸介」
の遺児として、その实在性をおわせる。もとより、「ゆきのま
へ」が「木村常陸介」の忘れ形見であったかどうかの考証はここ
では必要ではない。これは、野間光辰氏も言うように、「恨の介
の恋人の悲劇的な最後を、より悲劇的ならしめるために、数奇な
運命を設定した」と見てもよく、また、田中伸氏の「作者は雪の

前の境遇にとつては傍系の話題とも云うべき、秀次の妻妾たちの最後にあえて筆を費し、そのみならず、それらの女たちが打首による処刑という史実を、すべて自害という最後として描出している点、特に作者の意志が強く加わっているもの」という所説も、妥当なものとすることができる。しかし、これらの見解もふくめて『うらみのすけ』でたいせつなことは、「うらみのすけ」の命名や、「ゆきのまへ」の出自に見られる彼岸的世界から現世への転成である。「しやうじがごけ」によって語られる「ゆきのまへ」にまつわる挿話も、当世の文芸のもった時好性の一つである。この時期の『信長記』や、『大坂物語』『聚楽物語』などの古活字版の刊行は、この間の事情をはっきりと示している。これらは、いづれも身近かな過去の戦乱に取材の文芸である。たとえば、『大坂物語』は、関が原の合戦にはじまり、大坂冬の陣、夏の陣の叙述を中心とする戦記もの一つであるが、巻末に当時の首帳までものせて、その実録性を印象づけている。また、『聚楽物語』も、秀次の謀反事件を中心に、秀次の高野山での自刃、その妻妾の京都での処刑などを描いている。『大坂物語』や『聚楽物語』の数多い再刊は、当時の享受者層の実録ものへの関心のほどをうかがわせる。『聚楽物語』の悲劇の構造も、当時の読書人の時好性にそつたものとして理解してよい。「しやうじがごけ」のなが語りも、いわば異説『聚楽物語』としての意味をもつていた。
 「しやうじがごけ」によって語られる「このしざ」は、ま

ず「関白秀吉」の威勢にはじまり、「中納言のきやうひでつく」の謀反事件のてんまつが、十六歳の「おこぼの上らう」に視点をあてて、妻妾たちの最後を中心に描かれる。「もがみ殿の御むすめ」「おこぼの上らう」については、『聚楽物語』との間に異同があるが、いまはそのことは問わない。しかし、すくなくともここで、『うらみのすけ』の作者が、この女性に焦点をあてたのは、実説「秀次謀反事件」のなかで、最年少の「もがみ殿の御むすめ」の薄命の最後が、当時も悲劇として語りつがれていたことによつていよう。『うらみのすけ』の作者も、このことによる虚構を、ここでこころみたのである。田中伸氏の「殉死という近世初頭らしい刮目に価する事象に、この発想を考える」という見解も、このこととの関連で評価することができる。また、このことの本質移転として、「ゆきのまへ」の急死にともなう侍女たちの殉死が美化されたのである。

しかし、ここでもう一つたいせつなことは、「きよみづ」の享楽風俗のなかの世俗として登場したはずの「ゆきのまへ」の変質である。「きよみづ」からの下向の時点で「くものうへ人」に還元され、「あじろのこしを御だうのうちへかきいれ」られてからの「ゆきのまへ」は、「この衛殿うちへいらせ給ふ」高貴の女性に変容する。「あじろのこし」は、親王・摂家のものである。このことは、『うらみのすけ』の作者が、この物語の舞台を「この衛殿」としたこと、また、「ゆきのまへ」を、史実をまげてまで

も「この衛殿」の養女として設定したことも無縁ではない。
これは、『うらみのすけ』の成立にもかかわる重要な問題である。

3

かつて野間光辰氏は、『犬まくら』『尤之草紙』の成立事情を論じて、これら初期の「かな草子」が、「貴人の御伽の料」としての制作であったことを明らかにした。これは、「かな草子」の作者層や、「お伽衆」の属した文化圏の推定ばかりではなく、この時期の文芸一般の性格や、その文芸性の推定に、一つの手がかりをあたえたことになる。

『うらみのすけ』も、その原型は、写本・古活字本によって伝えられているが、このことは、『うらみのすけ』の文芸構造を論じるうえで不問にはできない。いうまでもなく、写本・古活字本の享受層は、かざられた上層の文化人たちである。さきの野間氏の指摘によれば、『犬まくら』は、三藐院近衛信尹を中心として、その側近や、出入りの「これかれ」の「お伽衆」の合作であったとある。『犬まくら』の成立は慶長十一年、近衛信尹による、『三藐院千句』の始行は慶長十四年。『うらみのすけ』の成立を、慶長末年とすることについては、諸家の見解の一致するところである。つまり、近衛信尹は、『うらみのすけ』の成立の時点では実在の人物である。このこともかかわって、『うらみのすけ』の

舞台の「この衛殿」への移行は、一定の意味をもつことになる。
「この衛殿」とは、烏丸通今出川の御所の築地内にあった左大臣近衛信尹の邸宅である。こればかりではない。「しやうじがごけ」によって語られる「ゆきのまへ」は、近衛信尹の養女として設定される。

そのおにうゆるくれなゐは、つつめどいろのますふせい、
このひめみやこにかくれなし。ある時みづからをこの衛殿へ
めされつゝ、いかにきくかごけ、かぜのたよりにきつるは、
きむらのひたちがむすめをやしなひそだて申すとききつるが、
あはれそのひめをわれらに得させよかし。そのうへ名ある人の
むすめを、いやしくなしては何かせん。われらにえさする
ものならば、くさのかげなるちゝ母の、さこそうれしからま
しと、いろ／＼おほせある間、ちからをよばずかのひめをこ
の衛とのへ参らせ、みづからともまいりつつ……

これは、虚構というにしては、あまりに実在の近衛信尹の身边に近い。『うらみのすけ』の作者もまた、『犬まくら』の作者群と同様に、近衛信尹の近習ないしは、伺候の「これかれ」ではなかったか。「ゆきのまへ」のモデルは、野間光辰氏も仮定したように、あるいは『聚楽物語』の「備後が女房最後の事」に伝える白井備後守の遺児であったのかもしれないが、そのことの当否は別としても、「ゆきのまへ」を、「あはれそのひめをわれらに得させよかし」として、近衛家の養女にする発想は、すくなくとも、

在世の左大臣近衛信尹に親近の人物、または、近衛信尹じしんでしか可能なことではない。このことの想定を前提としないかぎり、「ゆきのまへ」の「上らう」としての形象化は理解できないし、

写本・古活字本としての文芸構造の特性も説明しつくせない。

「ゆきのまへ」の名に象徴される悲恋の死との複合を、「くものうへにて、女御きささぎの御せつのおそびのありしとき」、琴の上手によつて、「御かどえいらんましまして」の命名とする発想も、このことをぬきにしては考えられない。「うらみのすけ」の文づかいを、これも実在の「きくいでいどの」(今出川晴季)の娘としたことの意味も、それとしてなつとくすることもできる。

松田修氏の言う慶長十四年の宮女密通事件や、野間光辰氏の言う松平若狭守近次の禁裏女房との密通事件は、当然『うらみのすけ』制作の背景にあつた。これらの結末は、当時の諸記録も伝えるように、いずれも勅命による重罪である。いまそのいくつかを、『大日本史料』(十二・四・六)によつて示すと、次のようなものがあつた。

○慶長十二年二月十二日乙巳の条(十二ノ四)

廷臣猪隈教利、勅勸ヲ蒙リテ、出奔ス、

〔言経卿記〕二月十二日乙巳、猪熊少将(教利)出奔也、云々

(大坂へ也云々)、昨夕勅勸也、云々、女院御末、密通也、云々、

〔言緒卿記〕二月十二日、猪熊少将、勅(○以下)

十二日、猪熊少将、宿所ヲアケ、他国サラレ了、

官女五人、公家衆七人、淫蕩ノ事、發覺シテ、刑ニ処セラレ、教利マタ捕ニ就キ、死ニ処セラル、コトハ、十四年ニ、各其条アリ、参看スベシ、

○慶長十四年八月四日癸丑の条(十二ノ六)

家康、重ネテ、大沢基宿(侍従)、板倉重昌(内膳正)ヲ、京都ニ遣シ、宮女処分ノ事ヲ奏請ス、尋デ、所司代、板倉勝重(伊賀守)、駿府ニ赴ク、女院、女御、並ニ、使ヲ駿府ニ遣シ、之ヲ議シメ給フ、

〔御湯殿上日記〕八月四日、はるゝ、するかより、大さは、いたくら内せん、のほりまいらせて、こんとの女中の、らんたい、けぎりん、もつともにて候まゝ、いかやうにも、仰しいたるへぎとの御事也、さりながら、こうなんも、なきやうに、御ぎうめい、かんようのよし、申さるゝ、

えとのしやうくんよりも、ほりのあはち(堀淡路守直重)のほりまいらせて、くわんしゆ寺(光豊)まで、おりかみをもつて、こんとの御事、御もつともよし、申さるゝ、

それにつきせつけの御しう、御さん候へきよし、くわんしゆ寺中納言、にし三てう中納言、御つかい也、おのゝ御さんにて、せいりよう殿にて、御たいめん有、こんとのやうたい、さたのかきりに、覚しめし候まゝ、きつと仰つけられ候はんと、おほしめし候は、いかゝ御ふんへつ候やと、御たんかう也、もつともよし、御申にて、すなはち、大さは(侍従)

へ、仰せいたさるゝ也、

『御湯殿上日記』の「せつけの御しう、御さん候へきよし」の記事は、かなり重要な意味をもっている。いうまでもなく「この衛殿」は五撰家の一である。これらの一連の事件には、近衛信尹も、事態に無縁の人物ではない。「あやめのまへ」の文づかいに對する「ゆきのまへ」の述懐は、このこともふくめて、情況の重さをもの語っている。

なふ、いかにきこしめせ。くわんをん(親音)よりの御つげといひ、
そもじさまのおほせといひ、まつばらのはゝもしるならば、
一かたならぬ事共、ふみの返事ばかりはと思へども、しぜん
此事もれ聞え、うへの耳にたつならば、みづからが事はくる
しからね共、そもじをはじめ奉り、るさいのふちにしづむも
のならば、くさのかげなるちゝ母のなまでながさむくちおし
さよ。此事ばかりは思ひとゞまり給へかし。

『うらみのすけ』のモデルを何にもとめるかの論は、さほど重要なことではないが、このことばの背景にあつた實在の事件や、事態の経過を考えると、いわば異説密通事件の舞台や関連人物を、「この衛殿」や「きくていどの」の子女とする構想は、『うらみのすけ』の私家庭的性格をぬきにしては考えられない。「ゆきのまへ」や「あやめのまへ」の形象化の意味も、それとして理解されなければならない。『犬まくら』でも示されたように、當時の貴族たちにとっては、「咄にしむ物」の第一は、「かの物語」

『うらみのすけ』の文芸構造

(好色の物語)である。同時に、「きよみづ」の交歓図のなかで、「上らう」たちによって示された享楽賛歌は、当時の貴族もともにもつた当世感覚であつた。したがつて、「ゆきのまへ」のおそれにもかかわらず、私家版『うらみのすけ』の作者は、親近の「きくていどの」の娘として「あやめのまへ」を仮設して、あえて「うらみのすけ」と「ゆきのまへ」との交情をみちびくのである。

それは御ことわりにて候へども、わかき時のならひ、
人(女)にとりて思ひのかゝらぬ事もなし。山となりてかすみの
かゝらぬ山も無し。いげのたとへにも申ぞかし。たとひこの
事もれきこえ、ものゝふどもてにわたり、すいくわのせめ
をうくるとも、それさぎの世のいんぐわと思ふべし。そのう
へせんじゆ(手)の御ちかひならば、さほどの事はあるまじや。か
ほどに申に、きゝわけ給ふまじきや。みづからもわかき身に
てかく申さんにもあらねども。

「わかき時のならひ」とは、『日本風土記』の「十七八は二度候か、枯木に花が咲き候かよの」(五・山歌)や、『淋敷座之慰』の「引かば靡きやれ、若いが二度ない物を」(吉原紋尽しのたゝき)などに代表される当世の「はやり小うた」の享楽感情そのものである。「にょにとりて思ひのかゝらぬ事もなし」の構文も、『十二段草子』の「女人と申すに夫に懸念の掛らぬ女人もなし。今夜は靡かせ給へや」を典拠とする享楽感情の移入である。ちな

みに言うなら、この『十二段草子』も、「古浄瑠璃」ではなく、『初期仮名草子』（古典文庫）の解題でもふれているように、慶長末年刊の伝嵯峨本『十二たんさうし』によるものと考えられるが、『うらみのすけ』でのかなりの部分の『十二段草子』の反映も、この時期の「かな草子」享受者層の一面の情感と、その複合構造のありようを示している。

また、「たとひこの事もれきこえ、ものゝふどもにてにわたり、すいくわのせめをうくるとも、それさきの世のいんぐわと思ふべし」の「あやめのまへ」の言辞も、「ゆきのまへ」の「しぜん此事もれ聞え、うへの耳にたつならば」とも照応して、宮女密通事件や、禁裏女房の密通事件のてんまつに見られるこの時期の法制の実態を示す。また、そのことを前提とする発言であるだけに、『うらみのすけ』の作者の傍若の文芸意識を示していることになる。「うらみのすけ」と「ゆきのまへ」との恋の経過のうわべや、修辭の旧態だけを見るなら、この作品は、中世風の恋物語の典型とも見られる。しかし、「あやめのまへ」によって語られるこの享楽感情は、もうあきらかに慶長末期の世俗感覚である。「うらみのすけ」の「清水観音」への起誓や、「観音」の夢想も、「そのうへせんじゆの御ちかひならば、さほどの事はあるまじや」の詭弁に消化されて、「若い二度ない」男女の交情を正当化し、『うらみのすけ』の情感を現世に直結させている。「さあらばせひにもよばず。くわんをんよりの御つげといひ、そもじのおほ

せをなどかそむき申べき」の「ゆきのまへ」の変容も見のがすとはできない。

「風のたよりを待ちえ、そゝろに筆のたてどもおほえ参らせず、もしほぐさとのみふてをそめまいらせ候……」として書きはじめられる「うらみのすけ」の恋文も、古歌の情感にいろいろならながらも、『朝顔の露の宮』のそれとは同質ではない。これは、『うすゆき物語』の「そぞろにすみをすり、ふでのたてどもわきまはず」などによつてもうかがえるように、当世の恋文の書きだしの定型であり、「君恋ふる心の闇にかき昏れて迷ひ来る身を哀れとは見よ」にはじまる「露の宮」の贈歌の叙情とは、はっきりとした相違を示している。「かつらのごときのきみなれば、とびたつばかり思ひねの、よるのころもをかへしても、こひしき人は見えもせず」も、「逢ひたさ見たさは飛び立つなアばかり、籠の鳥かやア恨めしやん」の「当世投節」の詞章や情感の移入である。「こひにはしなれぬものなれば、思ひあかしのうらかぜに、ひとりこがるゝねやのうちへ……君と契りしねやの内へ」などの構文も、「謡曲」の『恋重荷』の「恋よ恋、わが中空になすな恋、恋には人の死なぬものかは」や、『源氏物語』の「ひとり寝は君も知りぬやつれづれを思ひあかしのうらさびしさを」（明石）、『安達原』の「思ひ明石の浦千鳥、音をのみひとり泣き明す」、「ふしぎや主の闇の内を、物のひまよりよく見れば」などを、たくみに交錯させた修辭ながら、『うらみのすけ』独自の艶書形態であり、この

物語の作者の学識と、この時期の享楽感覺との複合である。

「ゆきのまへ」の返し文も、古歌をふまえた構文ながら、『朝顔の露の宮』の返歌や応答とは異質の積極性によっていろいろだられている。

うへの五つのもじならば、^(マヤ) ^(衛士) 惹きのたく火にもろともに、いざたちよりてそなれまつ、きりくべてたくおなじみの、けぶりと共にさえんとも、あはんと思へくすのは、あきのものかの事なれば、一むらすすきほにいでん。たぐなに事もさねかつら、月のもなかにことのは、そのすゑたのためかみな月、さだめなきよのことなれば、そのさきに身づからも、露ときえなばもとよりも、むまれぬさきとおほしめせ。もしもいのちながらへば、あとにあらはずその事と、かはりはせまじかならず。

これは、いうまでもなく、「きよみづ」^(備) ^(水) での「八こゑのとりはいつわりをうたふた。また夜はよなな、しめておよれよの」や、「思ひあかしねは、まつかぜもさびし。なさけはいまのおもひのたねよ。つらきはいまのふかきなさげよ。いつさて花のえんとならふずよの」の願望体现である。ふたりの密会場面の描写も、古典的情感との複合を示しながらも、「お伽草子」にはない近世色を示している。

つかぬ月日かさなりて、やうやくこんやは十五夜にもなりければ、うらみのすけ、しやうじがもとにゆきて、……ごけ

『うらみのすけ』の文芸構造

きいて……やがてこしらへて、かのうらみの助を女房にいたせ、うすぎぬをひきかつかせ、おりしも月にくまもなく、てる月をもうらめしやといとひ、……うらみのすけをばもみぢのものにかくしをき、ふかくしのばせ給ひ、それにて御まぢあれとて、しやうじが^(後家) ^(松) げはうちに入り、……そののちうらみのすけみゝをそばめ、御内のていをきくに、くはんげんのをとしきりにて、^(言) ^(松) ことのをとは、四ほんがりのまつかせにおとづれける。これも思ふ人のあるらむと、はや心もそゝろにて、もんのうちにてあしをとすとと思へば、すこしこゑほのかに聞ゆる。さればこそとおもひ、いそぎたちよれば……

4

このあたりの「しやうじがごけ」^(庄) ^(司) ^(後家) の手びきは、かなりの写実性をもっているし、「うらみのすけ」の心象描写も、これまでの文芸にはない新鮮さを示している。これらは、いずれも『うらみのすけ』の作者、ないしは享受者の「かの物語」への関心の所産でもある。

さかのぼって言うなら、恋文の贈答過程での次の一文も、『うらみのすけ』の成立にかかわって、この作品の文芸性の特徴を示している。

さて／＼御文のうち、いづれも聞えぬれども、うへの五つ

一五

の文字、さねかづら、月のもなかにあたらす。さればこゝに、
(細川) (宗) (應) ぼそかわのげんじにつかはれしそあんと申せし人、うらみの
 すけと一だんしる人なれば、此やどへゆきて、うたもが
(歌) (物) たりをよそのやうにかたりいだし、このこゝろをきくければ、
(宗) (應) (和歌) このそあんなわかのみちたつしやにてありければ、やがて心
 得、なきよなりせばのうへの五つのもしなくはとは、そなた
 のこゝろにいつまりわりなくといふ心なるべし。ふるきことばに、
 いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことばのうれしか
 らましとあり。……さねかづら、月のもなかといふ事は、
 三でうの右大臣のうたに、なにしをふあふさか山のさねかづ
(逢坂) ら人にしられでくるよしもがなとあり。さて月のもなかとい
 ふ事は、水のおもに照る月なみをかぞふればこよひぞ秋のも
 中なりけるといふ(崩) (詠) らうゑいのうたにみえしは、八月十五夜の
 事とおぼえたり。

「うへの五つの文字」「さねかづら」「月のも中」は、「ゆき
(雪) のまへ」の返し文のなかの歌物語の「謎立て」である。「謎立て」
 は、『宣胤卿記』にも「今日新作の謎立て、これを注進す」とあ
 り、『枕草子』の「ついでに、なぞなぞあはせしける。……こな
 たの人あなたの人、みな心もとなくうちまもりて、なぞなぞとい
 ふほど、心にくし」(二四三)や、『長秋記』の「院において和歌
 有り。……事畢りて連歌並びになぞなぞ物語の事などあり。」
 『徒然草』の「近習の人どもなぞなぞを作りて、解かれける所へ」

(二〇四)などによつても明らかかなように、中古いらいの言語遊戯
 の一つである。『犬まくら』にも、「嬉しき物」の第二に、「謎
 立解きたる」ともあり、「謎立て」は、この時期の貴族たちのあ
 いだでも愛好された遊びであった。さきに、「この衛殿」や「き
(亭) (應) くていどの」の設定について指摘したように、「うらみのすけ」
 の作者も、近衛信尹や今出川晴秀の近習ないしは出入りの「これ
 かれ」のひとりであろうが、『犬まくら』が、これら「これかれ」
 の書きとめの補正であつたように、『うらみのすけ』もまた、こ
 れら有閑貴族たちの遊びの文芸であつた。古歌や古物語にまつわ
 る「謎立て」は高次の文芸遊戯である。わずらわしいまでの古歌
 や古物語による修辭も、『うらみのすけ』の中世への溯行として
 ではなく、当時の知識人たちの好事の文芸遊戯の所産であつた。
 「謎立て」の発想は、「くずのうらみのすけ」「ゆめのうき世の
 助」ほかの命名でも、すでに示されていた。これらは、その時点
 で、すでに「謎立て」の効用をもち、古歌と現世を交錯させなが
 ら、この物語の推移を予測させた。
 「こしやうにて御げんさんに参り候べし」の後朝のことばによ
(後生) ってひきおこされた悲劇の構造も、『うらみのすけ』での言語遊
 戯と見てよい。これは、『朝顔の露の宮』の、「この世の契こそ
 薄くとも、来世は必ず一つ蓮の縁にならん」などに触発された悲
 恋の暗示ではあつたが、「こしやうにて」は、「こし(後生)やうにて」は、のちの「ゆきのま(雪)
 へ」の述懐によつて、なぞが解かれるように、「只大方と思ひ」

ての媚態にすぎない。「つねに六でうへんへかよひ」「ながれをたつるあそび物にも、こころをひかれる」「色ふかきおのこの「うらみのすけ」が、女の媚態を「後の世」ととり違えて悶死する構想は、いかにもふしぜんである。これも『うらみのすけ』での文芸遊戯の一つであった。

「うらみのすけ」の遺言の構文が、かつて市古貞次氏も指摘したように、「朝顔の、花の上なる露よりも、はかなき物は蜉蝣の……」の『住吉物語』の長歌によっていることも、『うらみのすけ』の文芸構造を論じるうえで、一つの意味をもっている。

『住吉物語』は、いうまでもなく中納言兼左衛門督の姫を主人公とし、継子物語を配した恋物語である。『うらみのすけ』の作者や、作者をとりまく有閑貴族たちが、「かの物語」を構想し、さしあたって『朝顔の露の宮』を意識したとき、継子物語の連想によって、『住吉物語』の長歌を配し、「うらみのすけ」の遺書を彩色することは、それほどふしぜんなことではない。『住吉物語』は、文緑・慶長のころには、「大形古奈良絵本」や、「絵巻物」として、当時の知識人たちの周辺にあった。また、寛永九年の流布本の刊行によってもうかがえるように、当時もかなりひろい読者層をもった古物語であった。同時にこのことは、『うらみのすけ』の「艶書合」的な一面もうきぼりにしている。「艶書合」は、『堀川院艶書合』からの伝統をもち、『はにふの物語』や、『玉虫の草紙』『虫物語』『かはる鳥の草子』『ふくろふの草子』など

うらみのすけの文芸構造

にも継承された日本文芸の一様式である。また、「艶書合」は、のちの『うすゆき物語』の成立によっても証されるように、この時期でも、知識人の文芸遊戯の一つでもあった。「うらみのすけ」と「ゆきのまへ」^(前)との恋文の授受も、「謎立て」とともに「艶書合」であったし、古物語の叙情の再現としての「うらみのすけ」の遺書の構文も、当世の「艶書合」の撰取であった。

「かな草子」の本質的な近世化は、いうまでもなく寛永期の整版本をまたねばならない。しかし、写本・古活字本『うらみのすけ』が、多くの負数構造をもち、多くの旧態を内包しながらも、この時期にあったことの意味は大きい。『うらみのすけ』は、一方では文芸遊戯としての制約をもってはいたが、他方では、その文芸遊戯のなかに当世を胎動させ、この時代の文芸秩序を、未消化や不協和のなかに模索した。すくなくとも、『うらみのすけ』の作者が、「中ごろの事にやありけん」や、「むかしわが朝のことなるに」などとする「お伽草子」の方法をさけて、文芸近世化の志向を提示したことの文芸史的意義は、正當に評価されなければならない。

(1) 松田修「うらみのすけ」をめぐって—仮名草子から浮世草子へ—
〔國語国文〕昭和30・12。

(2) 日本古典鑑賞講座「御伽草子・仮名草子」(「恨の介」解説)。

(3) 田中伸『仮名草子の研究』(第二部 一、「うらみのすけ」の発想をめぐって)。

(4) (5) (2)に同じ。

- (6) 日本古典文学大系『仮名草子集』(「恨の介」補注。
- (7) (2)に同じ。
- (8) 「仮名草子について」(大東急記念文庫第六卷・文化講座シリーズ
第一卷)。
- (9) 『中世小説の研究』。
- (10) (2)に同じ。
- (11) (12) (3)に同じ。

- (13) 「仮名草子の作者に関する一考察」(『国語と国文学』昭和30・8)。
- (14) (2)に同じ。
- (15) 寛永整版本では、読者層の拡大ともあいまって、「うらみのすけ」
の恋文の内容もかなりの変質を示している。
- (16) この部分も、寛永整版本では、さらに写実性を濃厚にしている。
- (17) 「近世初期小説の「性格」」(『国語と国文学』昭和26・4)。
(みずた・じゅん 本学教授)